

ぼくのノート

⑭ 子どもと大人

一九九一年フィリピンのピナツボ火山が大噴火し、避難した山岳少数民族・アエタの人々は、マラリアに苦しんだ。そんな中でも、小さな子どもたちは、元気いっぱいだった。

子どもは大人のミニチュアではない。一個の細胞が、十カ月後には三兆個となり、この世に生まれてくる。たった三キロの赤ちゃんは、一年たてば三倍の大きさになる。寝返りをうち、ハイハイをして、やがて歩き出す。アリンコがゴジラになっていくような勢いで成長する子どもは、大人とは全く別物だ。

体と心を傷つける有害物質や環境は、小さな子どもたちに、はかり知れない影響を及ぼす。大人のデータと経験を子どもに当てはめることはできないし、大人が作ったワクに閉じ込めて考えるのも間違いだらう。一人ひとりの子どもたちが、発信しているもの。それに目を向け、子どもたちをどう守っていくのか。試されているのは、大人だ。



認定NPO法人 いわき放射能市民測定室

たらちねクリニック

院長 藤田 操